

平幕優勝？ 喜んでいる場合かね
～大相撲5月場所観戦うわごと集～

<1> 総括

少々乱暴なデータかもしれないが、幕内全力士の成績を地位別に整理してみると下表のようになった。横綱は、在籍者2名、内フル出場できたのは1名。

横綱の総成績は（鶴竜一人の成績）11勝4敗（勝率0.733）。

横綱二人で稼ぐことができた勝ち星は11勝で、一人あたりの貢献度として見れば5.5勝にしかならなく、これを15日間出場したと見なしての勝率にすれば0.367になる。

大関以下及び前頭を5枚ごとに区切って同様のデータで比較してみると・・・

出場した力士の勝率で見ると、大関は幕尻の力士とあまり変わらない。つまり、入幕してきたばかりの若手力士や幕内に留まることが難しくなってきた古参の力士に近い状況にあると見ることも出来る。

特に上位に位置する力士達が、その地位ゆえの任務を果たしていないということが見えてくる。

	横綱	大関	関脇	小結	前頭 1-5	6-10	11-15	16-幕尻
在籍人数	2	3	2	2	10	10	10	3
全日出場	1	2	1	2	10	9	10	3
全出場率	50%	67%	50%	100%	100%	90%	100%	100%
総成績 (勝-敗-休)	11-4-0	21-16-8	15-12-3	15-15-0	74-76-0	73-70-7	69-81-0	19-26-0
出場勝率	0.733	0.467	0.500	0.500	0.493	0.487	0.460	0.422
勝星 在籍数	11勝 2人	21勝 3人	15勝 2人	15勝 2人	74勝 10人	73勝 10人	69勝 10人	19勝 3人
在籍者 平均勝星	5.5勝 0.367	7勝 0.467	7.5勝 0.500	7.5勝 0.500	7.4勝 0.493	7.3勝 0.487	6.9勝 0.460	6.3勝 0.420

<2> 大関とは？

大関で二場所負け越したことで、栃ノ心が西関脇に陥落した。今場所で10勝すれば大関に復帰できるということで報道陣や相撲ファンは注目した。

栃ノ心の働きに横やりを入れるつもりはないが、ここで冷静な観察をすることで、「大関」という地位の持つ意味を考えて見たいと思う。

大関が「二場所連続負け越し」するとはどういう状態かを具体的に表現すると、二場所の白星の合計が「0～14」であること。つまり最良で14勝16敗、最悪の場合0勝30敗ということになる。そしてこの力士が関脇に陥落しても10勝を上げれば大関に復帰できる。ここまでを合計すると、最悪のパターンの場合は三場所合計10勝35敗ということになり、このパターンを繰り返せば大関の任務を果たしたことになる。これを繰り返すと年間6場所の成績は20勝70敗になり、関脇以下の力士なら一気に十両への陥落の可能性がある。

大関はこのように、幹部社員としての「特権」に守られた階級になっているのだが、これが逆に地位ゆえの緊張感を創出できない理由にもなっている。

三役に昇進しなければ大関への道は開かれないし、大関にならなければ横綱への道は開かれない。昨今大関昇進の条件として「三場所で33勝が一応の目安」とされているが、四場所以上前の成績はあまり問題にされず、「瞬間最大風速の勢い」ばかりが重視されている感は否めない。

昇格基準が緩くて、降格基準が甘いのでは、優れた幹部社員を育成することにはならないのではないかと。一般企業が経営不振に陥ったり、社会的な問題を起こした時によく使われる非難の言葉を思い出す。

「自覚無き幹部社員」「危機感なき幹部社員」、永田町のある政治集団と同じかな？

<3> そして今場所を振り返ると・・・

平幕の、しかも三役経験の無い朝乃山が優勝する結果となった。

今場所の朝乃山は四つ身・はず押しなどを駆使して、自分の型になれなくても前進を続けていく「休み無き前進相撲」が目立ち、ここ数場所の低迷の壁を破ったかに見えた。この状態が次の場所でもその次の場所でも続けられれば・・・というところだが、それは先のことで何とも言えない。

好成績に繋がった背景はこんなところにあると思うが、「優勝」ということについては「上位陣が負け続けたことで転がり込んできた」と読むのが正しいかもしれない。

と冷めた見方をしているのだが、若い力士がひとつの「驚くような体験」をしたところから脱皮が始まり見違えるような力士に・・・ということも考えられるので、暫し注視ということになるだろう。

いずれにせよ、23才から25才ぐらいの若い力士達が、誰かの活躍をきっかけに刺激を受け合って競い合うようになったのは望ましいことで、まだまだ更なる新しい芽の吹き出しの可能性はあるので、次世代への移行の幕が切り落とされ、戦国時代の中から次の大関・横綱の誕生に繋がっていくことになるのかもしれない。

西小結御嶽海が9勝6敗。故障から復活の道を歩んでいる感じがしたので、来場所は面白くなるかもしれない。

前半もたつきがあったが、後半を7勝1敗で突っ走った玉鷲の相撲も、全盛期の力強さに戻っている感じがした。西3枚目で10勝5敗、三役返り咲きは濃厚、若手の台頭の中で年齢を感じさせない力強い相撲は、まだまだ期待できる。

竜電のセオリー通りのきれいで実直な相撲には、白鵬・遠藤に続く「美しさ」がある。技能賞を受賞したが、東5枚目での10勝5敗は何かを感じさせる物がある。

明生の「嘘のない相撲」も見る者を痺れさせる魅力がある。顎を引いて脇を固めたはず押しは逸品。

西7枚目で10勝5敗、立浪部屋の再興に繋がるに違いない。

志摩ノ海は十両で二場所連続優勝して新入幕で東12枚目の番付を手にした。跳ね返されると思いきや10勝5敗の好成績で敢闘賞。立派な体格を利した強烈なはず押しは、武双山の再来を感じる。

西4枚目阿炎が10勝5敗で敢闘賞を手にし、来場所は新小結昇進の可能性がある。直立棒立ちで、しかも爪先立って繰り出す突き押しは怪我に繋がる恐れがあるので、早く修正する必要がある。二三発突いたら叩くという千代大龍のような相撲も散見するが、これとて長続きするとは思えない。今のうちに基本をきっちり習得しておかないといけない。

<4> おまけ しかも大事な

上位陣の休場と不振で内容が乏しい場所で不満に満ちあふれている相撲ファンの前で、相撲協会はどう見ているのかわからないが、二つの大きな問題が発生した。

13日目の栃ノ心・朝乃山戦の勝負判定。物言いがついて土俵上での5～6分にわたる協議となった。国技館の観客にはその間何も情報が与えられず、まさしく「つんぼ状態」でざわついた状態が続いた。この間テレビ画面ではVTR画面が何度となく映し出され、どの画面を見ても栃ノ心の踵は土俵外に着地しているようには見えないし、実況中継のアナウンサーも解説者も栃ノ心の勝ちを信じた。

ところが土俵上の協議の結果は、「栃ノ心の踵が土俵外に着地した」旨の説明で朝乃山の勝ちとなった。テレビに映るVTR画面のコマ数ではわからないような問題で、ビデオ監視室の画面による判定であったのだとすれば、そのあたりまで踏み込んだ説明が必要だった。

この取り組み以外にも、審判長による「物言い協議結果の説明」の稚拙さが目立った場所だった。

そして最終日（千秋楽）に起きた大問題は米国大統領の登場。千秋楽という緊張した流れの日にはめ込んだいくつもの不自然な「特別対応プログラム」は、ひとことで言って「やりすぎなやらせ」であり、大相撲が政治利用された異常なプログラムとも言える。インタビューを受けた力士達からも同様のニュアンスの受け答えがいくつかあったらしい。

以上